

# ビワ生育情報

千葉県  
平成26年7月号

## 最近1年間の気象及びビワの生育状況

平成25年7月から平成26年6月までの月別の気象を表1に示した。月平均気温は、平成25年7月から10月は平年を上回り、平成25年11月から平成26年2月は1月を除き平年を下回った。3月から6月では4月を除き平年より高かった。この1年間の平均気温は15.8℃で平年をやや上回ったが、寒暖の差が激しい年であった。

本年産のビワの生育状況を振り返ると、平成25年の梅雨明けは、7月6日で平年より15日遅かった。梅雨明け後から夏の間は、平年より高く推移した。花房の着生率は平年より高かった。花房の発現は3品種共にやや遅かった。関東に接近した台風は3個あり、一部では潮風害がみられた。冬の訪れはやや早く、開花の進みは3品種共に遅かった。冬は厳しい寒さが少なく(最低気温-3.0℃以下の日が0日)、寒害の被害は平年より少なかったが、一部では雪害がみられた。果実の生育は11月から2月の低温の影響で平年より遅れたが、3月以降の高温で進み、最終的には収穫期は平年並みか2～3日遅れた程度であり、前年と同じくらいだった。

表1 平成25年7月～平成26年6月の気象 (暖地園芸研究所)

年	月	気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
		本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
H25	7	24.6	24.3	24.3	57	188	104	188	175	198
	8	26.9	25.9	26.6	32	143	13	254	220	257
	9	23.2	22.9	24.2	186	240	197	187	146	188
	10	19.0	17.9	18.3	455	253	301	130	137	165
	11	12.5	13.3	12.7	119	147	229	173	144	156
	12	7.8	8.5	7.4	75	91	148	180	166	164
H26	1	6.5	5.9	5.0	90	88	75	158	169	156
	2	5.9	6.3	5.7	142	103	147	120	151	133
	3	9.7	9.2	11.8	167	182	69	180	154	189
	4	13.3	13.9	14.3	166	172	225	191	166	201
	5	18.1	17.7	17.7	162	177	109	248	186	221
	6	21.2	20.7	20.8	334	247	243	159	135	111
平均/計		15.8	15.6	15.8	1,985	2,025	1,860	2,168	1,949	2,139

平年：1984～2013年の30年間の平均値

※ビワ生育情報(平成25年7月号)のH24.7～H25.6の平均気温が誤っていました。正しくは今月号の表1のとおりです。御迷惑をおかけし、申し訳ございませんでした。

## 本年度産果実の特徴

### 1. 熟期

収穫期を表2に示した。暖地園芸研究所における収穫始期、盛期及び終期はそれぞれ、「楠」が6月2日、8日、10日、「大房」が6月8日、10日、12日、「田中」が6月14日、16日、18日で、「楠」は平年より遅く、「大房」は平年よりやや遅く、「田中」はほぼ平年並みであった。秋期の高温の影響で花房の発現が遅れ、更に冬期の低温の影響で開花が遅れたが、3月以降は天候に恵まれたため、幼果の生育は急速に進み、果実が十分に肥大する前に着色が進んだ。また、収穫期直前に降雨が集中した影響で、生理落果が多くみられ、収穫期間は短かった。

表2 収穫期 (暖地園芸研究所)

品 種	収穫始期(月.日)			収穫盛期(月.日)			収穫終期(月.日)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	6. 2	5.29	5.31	6. 8	6. 3	6. 4	6.10	6. 7	6. 7
大 房	6. 8	6. 4	6. 6	6.10	6. 8	6.10	6.12	6.12	6.12
田 中	6.14	6.12	6.13	6.16	6.16	6.16	6.18	6.20	6.18

平年：1986～2013年の平均

### 2. 果実の大きさ及び収穫量

収穫果実の大きさと品質を表3に示した。果重は、「楠」が50g、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ74g、67gであった。3品種共に平年より7～11%下回った。種子数が少ない果実が多くみられ、冬期の低温による受粉不良の影響が大きいと思われる。

れた。

横径は、「楠」が4.3cm、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ5.1cm、4.8cmであった。3品種共に平年を下回った。縦径は「楠」が4.8cmで平年並み、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるといずれも5.3cmで、3品種共に平年をやや下回った。

果形指数は、「楠」が0.90、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみると、それぞれ0.96、0.91であった。3品種共に平年を下回り、縦長の果形であった。

本年の着花房率は平年より高く、寒害の被害が少なかったため、最終的な着果量は3品種共に平年より多かったが、「大房」を中心に果樹カメムシの被害が多く、更に前年ほどではないが、がんしゅ病の発生がみられたため、収量は平年より減少した。

### 3. 糖度及び酸度

糖度は、「楠」が12.5、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみると、それぞれ10.6、10.8であった。「楠」は平年より高く、「大房」及び「田中」は平年並みだった。

酸度は、「楠」が0.11、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみると、それぞれ0.14、0.32で、「楠」及び「大房」は平年より低く、「田中」は平年より高かった。

### 4. 食味

果実硬度は、「楠」が0.52、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみると、それぞれ0.51、0.48であった。「楠」は平年並み、「大房」及び「田中」は平年より軟らかかった。

糖酸比は、「楠」が119、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみると、それぞれ78、34であり、「楠」及び「大房」は平年より甘味を感じやすく、果肉も軟らかかったため、良好な味であった。

### 5. 病害虫及び生理障害の発生

本年は果樹カメムシのフェロモントラップ誘殺数が平年より多く、産地における発生量は平年より多かった。クワゴマダラヒトリの食害は、平年よりやや少なかった。病害では、がんしゅ病の発生がやや多かった。生理障害では、収穫期直前の降雨の影響で「田中」を中心に裂果の発生が多かったが、そばかす、日焼け、紫斑症の発生は平年並みであった。

表3 果実の大きさ及び品質

品種	調査地	果重(g)		横径(cm)		縦径(cm)		果形指数		糖度(Brix)		酸度(g)		硬度(kg)		糖酸比	
		本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
楠	暖地園研	50	54	4.3	4.5	4.8	4.8	0.90	0.95	12.5	12.2	0.11	0.15	0.52	0.53	119	80
	青木	69	80	5.0	5.3	5.2	5.4	0.96	0.99	10.7	10.4	0.11	0.15	0.50	0.58	93	69
	南無谷	73	77	5.1	5.2	5.2	5.3	0.98	0.98	10.5	10.4	0.13	0.18	0.50	0.57	80	59
大房	暖地園研	79	83	5.2	5.3	5.6	5.5	0.93	0.97	10.6	11.2	0.18	0.19	0.54	0.59	60	59
	平均	74	80	5.1	5.3	5.3	5.4	0.96	0.98	10.6	10.7	0.14	0.17	0.51	0.58	78	62
	青木	62	74	4.7	5.0	5.2	5.4	0.90	0.93	10.9	11.1	0.33	0.27	0.48	0.56	33	41
田中	南無谷	68	72	4.8	5.0	5.4	5.5	0.90	0.90	10.3	9.9	0.34	0.32	0.47	0.58	30	31
	暖地園研	70	80	4.9	5.2	5.3	5.6	0.92	0.92	11.3	11.3	0.30	0.30	0.50	0.58	38	38
	平均	67	75	4.8	5.1	5.3	5.5	0.91	0.92	10.8	10.8	0.32	0.30	0.48	0.57	34	37

果形指数：横径／縦径 糖度：屈折糖度計の測定値 酸度：果汁100ml中の酸含量をリンゴ酸(g)に換算した値  
硬度：果実硬度計による測定値 糖酸比：糖度／酸度  
平均：3地区の平均、平年：1986～2013年の平均(但し硬度は2000～2013年の平均)

## 8月～10月の作業

8月下旬から9月下旬までが、せん定及び施肥の適期となる。花芽は、9月中旬頃には確認できるようになり、10月に入ると発育が進み、花房の形を表し、10月上中旬には摘房・摘らいの作業が始まる。

### せん定

8月下旬から9月中旬に行う。徒長枝や混んでいる枝を間引いて、樹冠内部に光が入るようにする。作業の効率化を図るため、二段盃状形の樹形を目指し、低樹高化に努める。

### 施肥

9月に基肥を施用して花房の伸長、充実を図る。耕土の浅い園では、10a当たり成分量で窒素12kg、リン酸9kg、加里9kgを施用し、耕土の深い園ではそれぞれ11kg、9kg、7kgとやや少なめにする。

### 摘房・摘らい

摘房は発育不良の花房や混み合った花房を間引き、1樹の全枝の半数に花房を残す。摘らいは、花房基部から3段目までの小花梗の中から充実した2段を残して他をかき取る。花房の長さが3～5cmの時に摘らいすることで、開花期間を延長させることができ、寒害の被害を受けにくくすることができる。

【問合せ先：千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室 電話0470-22-2961】

※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>